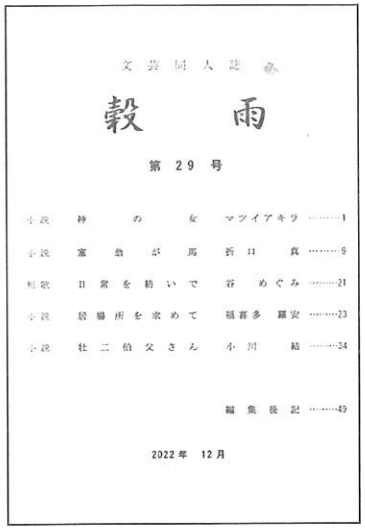
全国同人雑誌評

柴野毅実


文芸同人誌
穀雨
第29号

小説　神の女　マツイアキラ……1
小説　寒鮒が焉　浜口真……9
短歌　日常を紡いで　谷めぐみ……21
小説　居場所を求めて　福喜多羅安……23
小説　壮二伯父さん　小川結……34
編集後記……49

2022年12月

●『穀雨』（埼玉県）第29号

「文芸思潮」83号で追悼特集が組まれた河林満氏のカルチャーセンターの小説教室から、二〇〇七年にその発表誌としてスタートした誌。小説五篇、詞書付き短歌三首。同好の士が日常生活を出発点としてそこから逸脱しない作品を紡いでいる。男性を視点人物とする小説三篇の登場人物像、とりわけ女性像には類型的な印象がある。

小川結「壮二伯父さん」。生活資金に困った老齢の伯父が杉並の土地を手放して茨城に越す。姪にあたる「わたし」の、越す前日の伯父との関わりが破綻なく描かれる。好意をもっていた伯父との関わりが表面的であったことを今更に嘆く「わたし」の気付きや後悔を描く筆もまた、いかにも淡い。

●「こみゅにてい」（埼玉県）第115号

小説六篇、随想二篇。小説は設定や登場人物の背景が現実らしくみえるよう熱量をもって描き込んであり、そのことで反対に、表現したいテーマへの淡泊さが際立った。

三沢充男「四二二号室」。介護職に就いた元気な七十代男性の視点人物が、入所者となって再会するかつて好意を抱いた女性から下の世話を拒否される。視点人物の立場からひたすら自らの良心的な振る舞いが描かれるが、俯瞰すると設定も結末も女性に対して懲罰的。それが現実であり新しい常識だとも読める。視点人物の最後の台詞にそれが極まる。作者によって意識的に仕組まれたうそ寒さであるならば、その意図は秀逸。

日本小説黎明の明治期来、男性の視点人物と都合のいい女性登場人物の組み合わせには食傷を覚えるが、読者の半数が男性である現世においては求められ続ける宿命か。

沢口みつを「極楽往生ツアー」の設定、非現実性は、現実らしさの追求が濃く感じられる当号の作品群中においては個性を放ち面白く読めた。

●「狐火」（埼玉県）第27号

小説六篇、俳句と短歌、旅行記。作品の長さや濃さに比して登場人物の多さ、会話文の扱い、用字・文法など、過不足を感じる点もあった。書き手のキャリアが長短ある誌と察せられるが、その利点を校正・編集に活かしては。

狐火
第27号

澤つむり「小鬼やらい」。数珠つなぎに「どつぼに嵌まる」経験を思い出すうちに現実の混乱が亢進する畳み掛けが面白い。視点人物「私」の、女のホームレス「彼女」を探す結末の必然性に布石があるとよかった。

●「あべの文学」（兵庫県）第34号

評論一篇、小説六篇、エッセイ。論文的、現地報告的、教養小説的など独特の方向性を持たせた作品と、手練れの小説が同居する。

加賀谷道子「シルバークラブ『料理会』」。テレビドラマ化できそうな、個々の人物の性格付け、エピソードの積み重ね、穏やかな着地に至る筋と、多くの読者に受け入れられる作品を目指して作り込まれた印象を受けた。

やぎみわ「ボルサリーノの出番」。姪の息子の結婚式と同時進行で視点人物の男性の家族との記憶と現在が描かれる。当号奥野氏の評論にある小説の筋4の形態の手本。これも練られた展開と帰結が、読者に受け入れられるであろう。

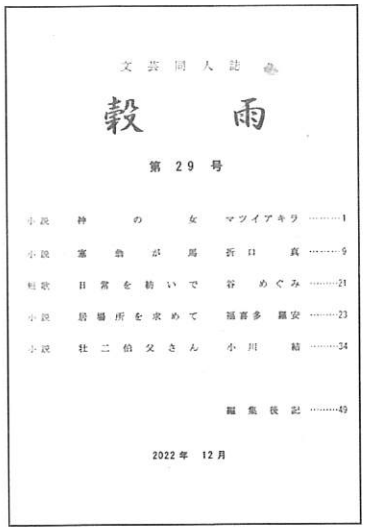
●「空とぶ鯨」（埼玉県）第21号

大阪文学学校通信生を母体として創刊された同人誌。小説主体で、十二篇の小説とエッセイ二篇、書評二篇。家庭や社会をテーマにしたリアリズム的な作品が多いが、小説のレベルは総じて高い。

巻頭は**坂井陽「ひとり病」**。他者からの干渉や容喙（ようかい）を骨の髄から嫌う二人の友人が、動機を悟られぬよう互いに殺人を依頼し、実行する。成功するも、一人は病を得、一人

全国同人雑誌評

柴野毅実


文芸同人誌
穀雨
第29号

小説　神の女　マツイアキラ……1
小説　蛮虫が焉　沂口　真……9
短歌　日常を紡いで　谷　めぐみ……21
小説　居場所を求めて　福喜多　鎮安……23
小説　壮二伯父さん　小川　結……34
編集後記……49

2022年　12月

●「穀雨」（埼玉県）第29号

「文芸思潮」83号で追悼特集が組まれた河林満氏のカルチャーセンターの小説教室から、二〇〇七年にその発表誌としてスタートした誌。小説五篇、詞書付き短歌三首。同好の士が日常生活を出発点としてそこから逸脱しない作品を紡いでいる。男性を視点人物とする小説三篇の登場人物像、とりわけ女性像には類型的な印象がある。

小川結「壮二伯父さん」。生活資金に困った老齢の伯父が杉並の土地を手放して茨城に越す。姪にあたる「わたし」の、越す前日の伯父との関わりが破綻なく描かれる。好意をもっていた伯父との関わりが表面的であったことを今更に嘆く「わたし」の気付きや後悔を描く筆もまた、いかにも淡い。

●「こみゅにてい」（埼玉県）第115号

小説六篇、随想二篇。小説は設定や登場人物の背景が現実らしくみえるよう熱量をもって描き込んであり、そのことで反対に、表現したいテーマへの淡泊さが際立った。

三沢充男「四二二号室」。介護職に就いた元気な七十代男性の視点人物が、入所者となって再会するかつて好意を抱いた女性から下の世話を拒否される。視点人物の立場からひたすら自らの良心的な振る舞いが描かれるが、俯瞰すると設定も結末も女性に対して懲罰的。それが現実であり新しい常識だとも読める。視点人物の最後の台詞にそれが極まる。作者によって意識的に仕組まれたうそ寒さであるならば、その意図は秀逸。

日本小説黎明の明治期来、男性の視点人物と都合のいい女性登場人物の組み合わせには食傷を覚えるが、読者の半数が男性である現世においては求められ続ける宿命か。

沢口みつを「極楽往生ツアー」の設定、非現実性は、現実らしさの追求が濃く感じられる当号の作品群中においては個性を放ち面白く読めた。

●「狐火」（埼玉県）第27号

小説六篇、俳句と短歌、旅行記。作品の長さや濃さに比して登場人物の多さ、会話文の扱い、用字・文法など、過

狐火
第27号

不足を感じる点もあった。書き手のキャリアが長短ある誌と察せられるが、その利点を校正・編集に活かしては。

澤つむり「小鬼やらい」。数珠つなぎに「どつぼに嵌まる」経験を思い出すうちに現実の混乱が亢進する畳み掛けが面白い。視点人物「私」の、女のホームレス「彼女」を探す結末の必然性に布石があるとよかった。

●「あべの文学」（兵庫県）第34号

評論一篇、小説六篇、エッセイ。論文的、現地報告的、教養小説的など独特の方向性を持たせた作品と、手練れの小説が同居する。

加賀谷道子「シルバークラブ『料理会』」。テレビドラマ化できそうな、個々の人物の性格付け、エピソードの積み重ね、穏やかな着地に至る筋と、多くの読者に受け入れられる作品を目指して作り込まれた印象を受けた。

やぎみわ「ボルサリーノの出番」。姪の息子の結婚式と同時進行で視点人物の男性の家族との記憶と現在が描かれる。当号奥野氏の評論にある小説の筋4の形態の手本。これも練られた展開と帰結が、読者に受け入れられるであろう。

●「空とぶ鯨」（埼玉県）第21号

大阪文学学校通信生を母体として創刊された同人誌。小説主体で、十二篇の小説とエッセイ二篇、書評二篇。家庭や社会をテーマにしたリアリズム的な作品が多いが、小説のレベルは総じて高い。

巻頭は**坂井陽「ひとり病」**。他者からの干渉や容喙（ようかい）を骨の髄から嫌う二人の友人が、動機を悟られぬよう互いに殺人を依頼し、実行する。成功するも、一人は病を得、一人

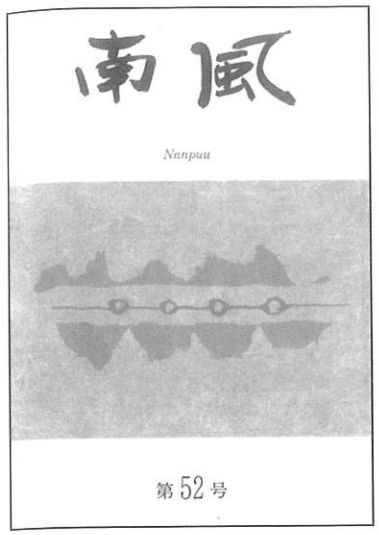
は妹を喪う。ストーリーに無理があるも、部屋に蜘蛛が増殖していく描写は不気味。

森ゆみ子「鯰」。東日本大震災をテーマに、不登校の甥の成長を生き生きと描く。茨城県水戸市では震災時停電が続き、東北の大津波や原発事故の情報がかなり遅れて入ったことが分かる。緊張感溢れる一篇。

●「南風」（福岡県）第52号

小説四篇とエッセイ一篇。女性を中心とした小説誌。高齢女性の視点から、夫の介護や家族の問題をテーマにした作品が増えている。切実な問題がそこにあるにせよ、虚構の背骨のようなものが欠落しているのではないか。

和田信子「明日はどんな日」。レビー小体型認知症の夫の崩壊と、夫への愛情を描く。孫の手を武器にこびとを退治に行くといった、妄想・幻覚のリアリティは感じられるが、日々の流れを平板に追っているだけという印象。小説が虚構であるという認識が足りない。



紺野夏子「帰郷」。兄の生活破綻を中心に描く家族の一代記。面白く読ませるが、この作品も時間の流れを忠実に追っているだけで、小説の空間が日常性の束縛から出て行かない。兄の生活崩壊の原因も追求されないのは平板に過ぎる。

●「AMAZON」（兵庫県）第514号

一九六二年、兵庫県尼崎市で発足、誌名は尼崎とアマゾン川に因むとある。隔月で六十一年間続く老舗の同人誌と言っていい。そのためか六十八頁と薄く、小説三篇とエッセイ一篇しかないため雑誌の傾向を読み取ることは難しい。

蔦恭嗣「石と水の女帝　宝皇女　巻一　明日香」。遠く飛鳥時代を舞台に皇極天皇を主人公にした歴史小説。安定感がある。登場人物は主人公をはじめとしてみな現代人風に描かれるが、それは歴史小説の宿命でもあるか。当時の仏教普及を、蘇我氏の政治的政策とする見方は冷徹である。

申鉉萬「ビジネス狂想曲」。在日の視点から日本の裏社会を描いている。重要なテーマとは思うが、小説としてのまとまりを欠いていて、歴史的な問題の提起などの影がすっかり薄くなってしまっている。

●「海」（福岡県）第2期第28号

一九八七年創刊、通巻95号の歴史ある同人誌。巻頭に掲げられた理念にたがわず、問題意識も高く、濃密で重厚な作品が並ぶ。小説五編、二氏の詩作品、エッセイ一篇、評論一篇と俳句から成る総合誌。特に小説はそれぞれ中篇といってもいい長さで、そうでないと各自の問題を掘り下げることができないとの認識なら、それを良しとしなければならない。

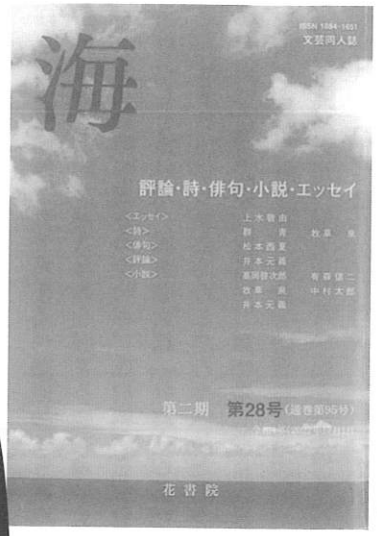
井本元義「虚空山病院」。ある精神病院の二代にわたる院長による生体実験とロボトミー手術の闇と、放恣な女性関係を描く。テーマといい、構成といい、文体といい、申し分なく、同人誌のレベルを超えていると思う。読後に謎の余韻を残すところがいい。井本氏はランボー論も同号に書いていて、緻密さはないかもしれないが、学者の書くものにはない熱量がある。

中村太郎「幼年期―郷原直太の場合・其の壱　じっけん（前編）」。自伝的作品か。おもちゃの耐久性を実験する直太と、彼を溺愛した祖父との関わりだけで延々と書く。焦点はいかにも小さいのに、最後まで読まされてしまう。筆力があるとは、こういう作品について言うのだろうか。

●「ガランス」（福岡県）第30号

一九九四年創刊、年一冊のペースで刊行。小説六編とエッセイ一篇。小説の上手い人が揃っているという印象を受けるが、ストーリー偏重で大衆小説的なのが気になる。時代小説が三篇もあって、いずれも人情物語的だし、ストーリーも類型的。

小河原範夫「すがおの滝歌心中」。この作品だけは人情噺的にこじんまりと纏めたという感じからは遠い。百姓の熊彦と貴族の女歌姫が、身分の違いを超えて歌によって心を通わせる悲恋の物語。泉鏡花的でもあるが、夢幻的な情



趣に欠けるし、現代的なテーマを追った作品とも言い難い。

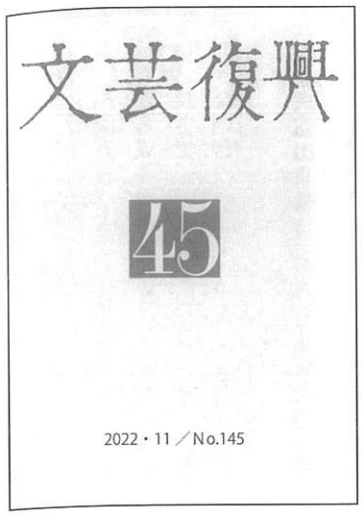
団地のクレーマー的な老人との心温まる触れ合いを描いた、**野原水里「音符のささめき」**や、戊辰戦争を背景に幕府隠密の恩返しを描いた、**周防凛太郎「針磨さむらい」**などは、テレビドラマ化したら受けるだろう作品と思う。

●**「文芸復興」（埼玉県）（第三次）第45号**　前々代表堀江朋子の遺稿を含め小説八篇、戯曲・随想各一篇。

長い歴史を持つ雑誌らしく、堅実な書き手が揃う。そんな中、**南みや子「父を試す（二）」**は数学を語り、かつ軽みのある文体が異色。連載を見守りたい。

森下征二「仮面の刺客」は、停止した成田エクスプレスで、向かい合わせた黒人男性とのスリリングな会話がよく練られ、若い中国人女性の変化は仮面劇の如く鮮やか、結末にも小気味よく裏切られた。

歴史物が多い中、**垣花理恵子「島へ――ニコライ・ネフスキー　人生の旅」**は短い戯曲だが、ネフスキーとその時代がくっきりと立ち上がってきた。



●**「彩雲」（静岡県）第15号**

創作一三篇の他、随筆、評論など。だが身辺回想的な文章が多く、創作と随筆とはどう区別されているのか。

阿部千絵「発掘が終わったら」。発掘現場の描写は具体的で時にユーモラス、夜ごとの夢はファンタスティックだが、切ない。実は不眠から逃れるための発掘作業。自然な筆致で感情移入しやすかった。夢がより現実に参入したら、ラストがもっと生きるのでは？

平田喜久夫「記憶吸虫7」連載最終回。遺伝子操作で暴力抑制ウィルスを感染させようとする科学者。治験者の「私」は、彼の牽強付会な自説に違和感を覚える。米作家リチャード・パワーズを思い出させただけに、結末の「ささやかさ」が気になった。

全国同人雑誌評

五十嵐　勉

●**「白鴉」（大阪府）33号**

「エリザベトを選んで」（蒔田あお）は一三三枚の力作で、内容も優れている。前半と後半が大きく分かれる構成になっていて、章立てとしての分け方にぎこちなさはあるが、組み立てとしては成功している。前半は、子連れ心中をした母親に残されて孤児となった自分が、いかに施設を経て、食肉工場に職を得、一四歳離れたやはり不遇な青年と結婚してスタートするかまでだが、後半になって、ストーリーは急転回する。夫の取引先相手への暴行による失職、子育ての窮地に加えて、自らが膵臓癌になっていることがわかる。夫は再就職に失敗の繰り返しで、嫌気がさし、パチンコに狂っている。癌はもうステージ4でホスピスの段階だという。今になって、追い詰められて子連れで自死した母親の立場がよくわかり、身動き取れない状況の絶望感に打ちひしがれる。しかしホスピスで再会した教会の牧師に出会い、彼もまた末期癌になっていることに、新たな希望をいだく。牧師から聞いた聖書の中の話――老女となってお腹に赤児を抱く、そのエリザベトへの親近感が、希望となって胚胎する。絶望に取り囲まれながら、希望への道に賭ける結末は、確かに光へつながっている。

ここまで追い詰められるケースは、現代において意外に多いのかもしれず、その点では表に出てこない現代がよく顕われているとも言える。その現実を見つめる筆者の直視の厳しさはけっして緩むことなく、深部への掘削を深めている。惨酷な状況に迫る筆者の的確な筆致は、作家の刃を十分備えている。光への持って行き方もいい。何より驚かされ、感心するのは、癌の死に迫った状況にリアリティがあることである。筆者は癌を体験しているのか定かではないが、この状況をフィクションとして創出できるのであれば、作家としての手腕はすでに卓越したものであると言わなければならない。今年前期の芥川賞二作品よりも遥かに読みごたえがあり、充実した内容を持っていた。文句なく優秀作。

全国同人雑誌振興会

●**「クレーン」（群馬県）44号**

今号は、小説はパッとしなかったが、評論・ノンフィクションに読ませるものがあった。**水丘曜一**氏の**「ロシア全体主義の源流――ソ連国家の出現と崩壊の序――」**には、歴史を冷静に見つめて事実と史実を刻み込む、透徹した照鑑を感じた。

現在の国家管理の機構を、一九一七年のロシア革命にまで遡って探っていき、このとき作られた「全露非常委員会（チェカー）」が「革命の番人」と呼ばれて、「監視、逮捕、審理、起訴、裁判、判決の執行すべてを一手に収めた、人間の歴史上またとない懲罰機関」であったことを示すことから始まる。

この機関がマルクス共産主義社会の実現の過程で、強権を持ち、様々に実行裁断していくことになり、それがソ連体勢を支え、なおかつ現在のロシアの強権独裁体制にも繋がっているとする。レーニンは口実に「テロは説得の手段である」として、このチェカーを利用して大胆過激に暴力革命を実現していく。「革命をかかげれば自分達は正義であり、それ故暴力行使も正当化されるという独善が革命党の中で、とりわけその上層部で思想的退廃を作り出していったからである。その典型が他ならぬレーニンとボルシェビキだった」――この過程を、日露戦争時から掘り起こし、第一次大戦とその後の革命の動乱を通して、どのように反対勢力、敵勢力を排除していったか、具に筆を刻んでいく。

その筆致は、歴史事実を切る鋭利な刃として、英雄の虚像を容赦なく裁断する。ソ連の革命がどのようになされたか、どのような強権で反対勢力を駆逐し、排除していったか、その克明な叙述が、自然に現在のプーチン・ロシアの内部構造を自然に浮かび上がらせる放射線のような効果を発揮している。

この文章を読むと共産主義の虚妄と強権とがよくわかる。ロシアという大国の内部の一面が露出し、あらためて、人間の権力という怪物の姿が浮かび上がってくる。無論、この政治権力の中枢は、共産主義国家に限らず、資本主義体制においても、構造的には存在するものだろうし、現在はコンピューター管理によってもっと厳しい一面が進んでいることは否定できないが、強権の歪みを典型として露骨に取り出して感じさせてくれるこの評論は迫ってくるものがある。今はなかなかこういうハードな、読みごたえのある評論にはお目にかかれない。享楽に走る現代の傾向とは逆に行くこうしたものこそ真の文章と言えるだろう。今後も期待したい。推薦作。また今後はこれを契機に、まほろば賞に評論部門を加えることも、考えてみたい。

●**「あべの文学」（兵庫県）35号**

「つなぐ橋」（高琢基）は、韓国の故郷の地をツァーで訪れる在日三世の物語で、もうほとんど日本に根付いている自分が、最初はもうとっくに母国と切れて、軽いノリで観光を続けていたところ、染み渡り、また湧き出すように、日常を超えた不思議な故郷の力を覚える――地と血の力を覚醒する流れで、結論は、的を外れていない。しかしそこへ到達するまでのノリが、俗っぽく、覚醒の重要な部分までも重みをなくしているような、軽さを払拭できない。パンチパーマなど観光気分に乗った一行の雰囲気も、絆の決定的な何かをもっと具体的に重く出せたら、成功したのではないかとふと思ってしまう。あくまで、血と母国という大きなものにこだわるなら、もっと違う提出の仕方があるのではないか。民族、文化、歴史と、様々な角度からもっと重層的に掘っていくべきだろう。ここには、華僑のような存在も含めて、文学としてもっと掘り起こしていかなければならない問題が横たわっているように思う。国と国との間の交流が戦前とは比較にならないほど活発になっている現在、この領域はさらに掘り下げて拡大されるべき様々な問題を孕んでいる。私の見る限り、この新領域を意識的に、新しい方法で取り組んでいる作家はまだいない。国境の垣根が人的にはどんどん低くなっている現在、また移民という歴史の浅い日本にとって、ここには取り組まなければならない文学領域がある。ぜひ今後、この領域に果敢に足を踏み入れ、新しい人間の問題として文学を開拓していってくれることを期待している。

優秀作

「エリザベトを選んで」蒔田あお「白鴉」33号

推薦作

「ロシア全体主義の源流――ソ連国家の出現と崩壊の序――」水丘曜一「クレーン」44号

全国同人雑誌振興会